海を渡った「芥川賞」

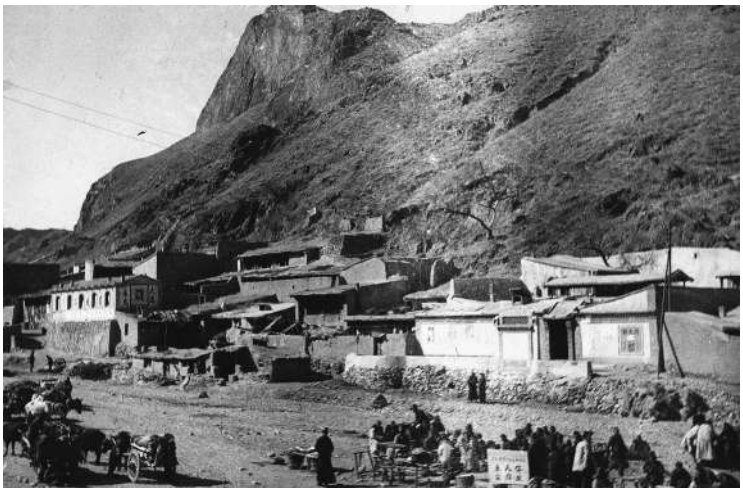
鶴留エマ（会員）

昭和十八年九月に第十七回芥川龍之介賞は北京を通り越えて北へ二百キロの蒙疆は塞外の地、張家口へやって来た。

張家口は昭和十二年八月末に東條兵団と板垣兵団が二方から周辺の地の激しい武力応戦と抵抗に出合いつつ到達し、山上で明日は張家口に入城と眼下の灯火の瞬く市街を眺め、予定の砲撃を躊躇して破壊するに忍びずと考え一日の停電もすることなく総ての施設が日本軍に接収された、と記録がある。日本の支配下になった。

シルクロードの出発点であり、モンゴル語で呼べば「カルガン」陸の港の意、モンゴル共和国（外モンゴル）国境に近接の要害の地で外万里長城を抱いて山嶺が郊外を取囲み、古今変わらず軍都である。

昭和十二年十月にモンゴル各地から支配者の王達が百霊廟で第二次蒙古大会開催。



張家口（カルガン）市郊外、手前に万里長城がある

雲王（雲端旺楚克）は百霊廟近くのハルハ右翼旗の旗長（郡王）、いつも質素な木綿の衣服を身につけ、華美な服装の写真はないと伝わる民族指導者が主席。

徳王（徳穆楚克棟魯晋）副主席。蒙文、西蔵文、中文、英語も理解し日文も蒙文と文法構成が同じなので文章の大意はわかる。射撃の達人、無論乗馬も。昭和十年に関東軍は徳王にスーパ六人乗り飛行機を操縦士、ガソリン付で贈呈。徳王は非常に喜んだ。当時、専用機を持っていたのは張作霖と蔣介石ぐらいであった。

関東軍は徳王の領地西ソニット辺りに飛行場とガソリン備蓄所の建設目的をも兼ねての一策であった。

二回に渡る訪日の折に天皇から白馬一頭が徳王に贈られた。徳王は張家口へ帰

国後しばらくすると、その白馬を蒙疆政府参事官、和佐蔵之介顧問にあげた。和佐氏は政府厩舎に自ら職員まかせにせず白馬の手入に毎日立ち寄った。末娘素美子さんの話である。

和佐顧問は中国語と乗馬に堪能で、その中国語は蒙疆随一と謳われて、徳王の信頼の厚く数々の場で通訳をする中国通であった。

その乗馬は敗戦時に北京に出張していた氏が下りの京包線が八路軍に破壊され不通となっていて張家口へ戻る手段がなくなっていた時に、馬で数日乗り継いで張家口へ帰ったと聞く。

その帰張が、すでに中共軍占拠下の張家口で馬を撃たれた氏は逮捕。数か月後に他の日本人や中国、蒙古人政府役員と清河河原の北白川宮永久王記念追悼碑（昭和十五年夏にこの地で飛行演習中の飛行機が墜落し観閲中の宮殿下や軍官民間の参列者死傷の大惨事を追悼し造られた。敗戦直後、中共軍に破壊された）の辺りで銃殺刑にされた。北京へ向かって日本人総帰国の為の汽車に乗った家族とは行き違いに。北京で氏を待つ家族に悲報は数年後に判明。

昭和十二年第二次蒙古大会で「モンゴルはモンゴル人で」と「高度自治」を求めて独立国家、蒙古聯盟自治政府を成立し南京政府も承認した。

昭和九年頃から関東軍はモンゴル王侯や独立運動家を援助。軍事協力を具体化して来た影響は大きかった。

昭和十三年には高齢の雲王が徳王に後事を託して他界し徳王が政府主席となる。「徳王は日本軍と提携するにしても、日本軍が蒙古を必要とする真意を知悉していて、蒙古が日本側から受ける援助に対しては堂々と要求していた」と元蒙古政府総務庁総務科長中島万蔵が書いている。

昭和十二年八月二十七日に張家口に無血入城した日本軍を後盾とした、十月に成立した蒙古聯盟政府は長年の中国支配から「高度自治」を勝ち取ったがその政権は主席、徳王、各職務長は全てモンゴル人が配された。多くの実務は日本人が行った。通貨は蒙疆銀行発行の蒙銀券、兌換は金・紙幣本位。金の裏付があったので北支一の信用があり敗戦後もしばらく北京で流通したと聞く。通信、電力、鉄道、医療、教育等々都市のインフラ総てを既存活用、新設と二年程で整備した。

昭和十四年十一月蒙古聯合自治政府（通称蒙疆政府）とした。

半年は冬、残り短い春夏秋の四季の張家口。モンゴル高原の入口に位置する。海抜九百米長城を抱く低い山脈はゴツゴツとした岩山でろくに灌木も生えない禿山なのに五月に入るとその山肌が若草色のビロードのように見える。秋の蒼天は例えようもなく高い空が美しい。名産の落花生が子どもの口に入るのもこの頃。冬は南口の柿を二重窓外枠に置き柿のシャーベットを暖い室内でお匙でそっと口に運ぶ。戸外は零下三十度前後の世界。

雨や雪の日は少なく、偶に降ると大雨が昭和十四年に降り六月前後であったか。京包線が二か月も不通であった。十八年には市内の家々が流され行方不明の人数多く、日本人国民学校の生徒も一人見つけられなかった。山裾の所々に土石流の形の川状の流水のない場所が見られる。大雨になると濁流と化す。

珍しく大雪で我家の道路からの二十段上る階段が雪で埋れ子どもの背丈程と祖母が話していて、吹溜りで一米も積った。

集団登校はいつもだが黄塵の日は皆で手を繋いで固まって十分足らず歩くと第一国民学校に着く。帰校時はそれぞれで一人で帰る時もあり、夏の日であったか墓地の中の道で糞転しに出会う。しゃがんで見てる糞転しは一センチ前後の黒っぽい球形の虫で馬糞等丸めて転がして体より大きな糞の球に仕上げお家にか何処

かへ運ぶ。少しずつ行きたい方へ全身で押す。

墓地の原っぱは社宅の子ども達の遊び場で、学校への近道でもあった。社宅団地に冬はスケート場の広場、テニスコート、スベリ台、ブランコ等あるのに何故か。墓地は横穴式で横穴を数米下りると奥の方に木棺が置かれているのが入口から少し下がると見えた。何か所あったか覚えていないが二十か所もあったろうか。

ドッヂボールをしていて球が転がり落ちると男の子が拾いに行って、お棺があるよ、と話した。道の片側は通学道路に面し一方は原野で数百米離れた場所に明代からの狼煙台が崩れかけてあった。狼煙台の下部には洞穴が数か所穿たれて浮浪者が住みついている。

ある日、集団登校で学校へ向かって蒙疆新聞社横の道にさしかかると先を歩いていた男の子達が立ち止ってしまった。女の子達が追い付くと地面に布靴を履いた足の骨が転がっていた。人間の脛が骨だけになっていた。上級生達が狼煙台の浮浪者が病気だかで死んで、狼か野良犬が咥えだしたかと云っていた。

その日の学校の帰り道は同級生の悠紀子ちゃんと二人で怖かったが遠くから恐る恐る見通すと道にそれらしきものは見当たらなかったので胸を撫でおろして近道を帰った。大人達の誰かが片付けたのかも。昭和十八年だった。

昭和十四年四月に父、小池秋羊が張家口の電力会社、蒙疆電業株式会社に転職し勤務が始り、後から母や祖母、弟数えの二歳、私は四歳で十一月に冬に入った張家口に渡った。

私達家族は神戸港から船で天津の塘沽港に四日半かけて到着した。船内は二等船室で作り付けのベッドが数床あり、お風呂がついていてバスタブの水面が波の揺れと同じくチャプチャプと動いているのが不思議に思えた。浴室には丸窓がついていて外を覗いたら海面が甲板とは異なって近くに見えて吃驚した。船室内は洋風の設いで家具や壁はクリーム色だったと母は話している。

島田や着物姿の女性の団体が近くの船室で弟と私を甲板に連れて行ったり、遊んで貰った。後日、初めての汽船の旅と最終引揚げの昭和十九年十月の関釜連絡船釜山―下関の一昼夜の船室に畳を敷いて仕切もなく多勢の人が座ったり、寝そべっている状態、浮袋を身体の前後に付けられ身動きもままならない何か臭い重い空気の中で過した船旅を思い出して母に聞くとあの女の人達は芸者さんよ、とのこと。

日本の進出に従って天津・北京・張家口も女給、芸者、花柳界が出現した。なかでも張家口は駐蒙軍の数多く、政府や国策会社も大規模で接待の需要が多くて花柳界が栄え、芸者の格もレベルも北京より高かったと云う。

船が塘沽に着くと埠頭から出迎えの叔母に抱かれて二頭立の白馬の引く馬車に乗った。

天津・北京と汽車に乗り北京で頤和園で遊んだ。雄大な建造物の離宮や人工湖、接岸しているような石の船に大人達は感心した。私は弟が暑がって脱いだ母の手編みの白い毛糸のコートが手許にないと母が気付き大急ぎで来た道を引返したが、最早や誰かが持去ってなかった所が萬寿山としか覚えていなかった。

北京から八達嶺を越すと汽車は台地のモンゴル高原に入り、当時は七時間かかって張家口へ到着する。

父の仕事先「蒙疆電業株式会社」通称電業の本社ビルは張家口駅前の交差点の角にあり、グレーの一部三階、地下二階、角の正面玄関は丸くカーブした半円形の階段を五段昇ると、ホールに受付があり、向って右手に地下階への階段がある。エレベーターがあったかどうか覚えていな

い。

地下一階に理髪店とレストラン「銀杏荘」があった。赤いソファのボックス席がカーテンで仕切られて、私には別世界の雰囲気に思えたし、オムレツ仕立のチキンライスが大好きで、家族で行くと嬉しかった。

祖母に連れられて理髪店へ来た後は怡安街の日本蕎麦屋の天婦羅蕎麦と決っていた。

電業は創立、昭和十二年十月。八月に東條兵団が無血入城してからも多くの都市の基幹産業や施設が日中戦乱の最中でも可動していた。引続いて日本軍に接収され一日の空白も起きず張家口市内は生き続けていた。

電業も例外ではなく接収直後、満洲電電から派遣されていた関係者の並々ならぬ仮運営と軍の手助けで、唯一の小発電所を吸収合併を行い蒙疆電業株式会社は設立発足した。

大同・フフホト・包頭と支社・支店も作り蒙疆一円に火力電力の供給が始まる。

しかし、辺地、奥地の敷設は八路軍やゲリラに襲われて困難を極める所もあり、白系ロシア人の銃装備の人達を傭って同道したり、軍の守備のもとに作業の地区もあった。敗戦までも日本軍の守備範囲は中国では点と線であった。

笑い話として伝わっている電業のアイロン。会社で電気アイロンの販売を始めた。珍しい家電の走りであった。買い求めた人達から会社に苦情が次々と。何と電圧が低過ぎてアイロンが熱くならなかったとか。

電業のトップはモンゴル人李芳洲初代理事長、日本人益進副理事長、古泉光男副理事長。二代目で敗戦、八年間の蒙電の存在年数である。

蒙疆政権そのものが八年間で様々の事柄を急展開して都市型の基礎を整備。病院、学校、鉄道、通信、敗戦で中断するも近年そのインフラ化が中国で評価を得て大学間で今後の国造りの参考にと研究され始められた。

張家口に住み始めて三〜四年に達すると、父や家族もモンゴルの地であっても漢人の中国の街の中での生活を慣れ親しみ暮し始めた。しかし日・中間の乳幼児の死亡率が高かった。

社宅は会社から十五分位歩く高台に作られ、三米高さの練瓦塀に囲まれ通用門は一か所、門番小屋が付き、白髭が長く長身痩せぎすのお爺さんが門番。小屋は泥壁で四坪ほど一坪ぐらいの高床があり木箱と上に薄い寝具か。泥壁に見事な拵えの青龍刀が掛けてあって鞘が本当に青くこの小屋に不似合に思えた。

冬は小屋の中で達磨ストーブの石炭が赤々と燃え、夏は蓬を長く編んで蚊やりとしてあり、集団登校の集合場所でもあった。お爺さんが喋ったことは一度も聞いていないが三国志の名将はかくもあるかとその風格を思い出す。

社宅は公館（副理事長宅）一戸建ての科長用が五戸、二戸一棟の係長用五棟、社員用四戸建が九棟だった。男子寮、女子寮があった。

私の家は二戸一棟の係長用で、畳の三部屋、二部屋前を通して二米巾の板張床のサンルームと玄関ホールが広く一部屋になっていた。

集中式スチーム暖房、タイル張りの風呂、水洗トイレ、台所、ガスはなくて煮炊きは電気コンロだった。二重のガラス窓は観音開きの外見は洋風の家だった。

この家には訪問客や泊り客が多かった。蒙疆の各地から来張、日本から来た、お酒を飲みに等のお客様で、父は全くお酒が飲めない体質なのに酒席が好きで、母は日本酒を何時も用意していた。

夜が遅く八時半頃に暗くなる張家口では夕飯を済せ、お風呂にも入った後でも夏の夕方に又、子ども達や親達も戸外へ

出て遊ぶ。そんな時にアッツ島玉砕が子ども達で話題になった。私には玉砕の意味が未だ判らなくて家に帰ってから母に尋ねた。南の島で戦争があって日本の兵隊さんが全部死んじゃったのと聞き、大変なよくない事が日本に起きたと思った。

朝は祖母に起されて未だ眠いのにお手洗に連れられ用を済せながら聞くともなく耳に届くのは街中が起き出し動き始める気配の物音。鶏の刻を告げる鳴声。甲高い太々の叫び声、物売りの掛け声、荷車のガラガラと、犬が鳴く。高台の我家に街の目覚めが昇ってくる。聞きながら顔を洗う。私も目覚めてくる。

今でもこの状景に憶いが辿り着くと直ちに張家口へ飛んで行きたくなる。

一九八八年に敗戦後始めて張家口に行き、その後二十回は訪張した。が今でも張家口と聞くと憶いが、血が騒ぎだし冷静でいられない。

昭和十六年、張家口に住み馴染み始め、仕事も安定した日本人の間で文学に興味を持つ人の交流が生れ「蒙疆文芸懇話会」が発足。二十人が集まった。皆々が定職を持ち仕事の傍らの交友から始る。維持会費一人拾円（蒙銀券と日本円は同格）を集め同人誌「蒙疆文學」月刊を発足する事に。

昭和十七年六月、「蒙疆文學」創刊六月号発行。編集兼発行人　赤塚欣二、発行所　蒙疆文芸懇話会（張家口興亜大街和光荘二〇號蒙疆電業社宅赤塚方）、定価五拾銭。

雑誌の発行等の時期から、懇話会の知名度が上がってか、政府や、民間等の劇研や同好会が合体して懇話会演劇部とし加わり、放送局の要望でラジオドラマ、山本有三作「同志の人々」三十分の放送で、父も出演し、家族はラジオの前で聴き入った。二か月に一回夜のゴールデンタイムが提供されラジオドラマの生放送も試みた。

昭和十七年は蒙疆政府成立三周年に当たり記念枠行事で演劇部は張家口劇場で、菊池寛作「父帰る」を上演し娯楽の少い日本人の間で歓迎された。

蒙疆短歌会、美術協会も合併し、蒙古政府下の文化政策の一端を担い、政府からの補助金も出て、同人雑誌とは云えない存在になる。

「蒙疆文學」記念事業として「蒙疆文學賞」を設定、作品公募、小説審査員は、川端康成、横光利一、上泉秀信、北原白秋、前田鉄之助、三好達治の六氏に依頼した。小説入賞各一篇、蒙古政府最高顧問賞及び副賞金一千円、佳作各二篇賞金百円、詩入選一篇、蒙疆新聞社賞及副賞金百円、佳作各二篇賞金各五十円。

この文学賞審査員依頼後の川端康成の手紙と領収書、横光利一の選考作品批評の原稿のみが二人の作家の自筆で現存し、川端の封筒の宛名は小池秋羊で、今は私の手許に有る。

父が電業へ転職する前は、都新聞社に勤務、上海事変の時に特派員として上海へ派遣され初渡航し中国に魅了され、中国で暮らしてみたくなり、知人に張家口の蒙疆電業株式会社の総務の仕事を勧誘されて妻子や老母も連れて来てしまった。

記者としての仕事で当時の都新聞が力を入れていた文芸部も担当したらしく、大人気の流行作家とも知遇を得ていたのかも。

知名度の高い作家達を「蒙疆文學」の

懸賞公募作品の審査員に依頼できたことは、効果が大きかった。まず作家達に蒙疆の地に理解が深まり、広いモンゴルにモンゴル国を作る。その手助にのめり込んでいる日本人達。本当に人としての夢や理想の実現を仕事として。蒙疆で働いていた多数の大人達。

『その出発点や切っ掛けが日本の侵略戦争であったから何をしても許しは得られないのに』

外地で暮しをたて働き、希望と目的意識を持って文学を志す人を知り、時流にも合せた。

この懸賞小説に入選したのが石塚喜久三作「纏足の頃」、詩の審査員の北原白秋は審査後間もなく他界。懇話会の同人達は悲しみの内にも感謝を捧げた。

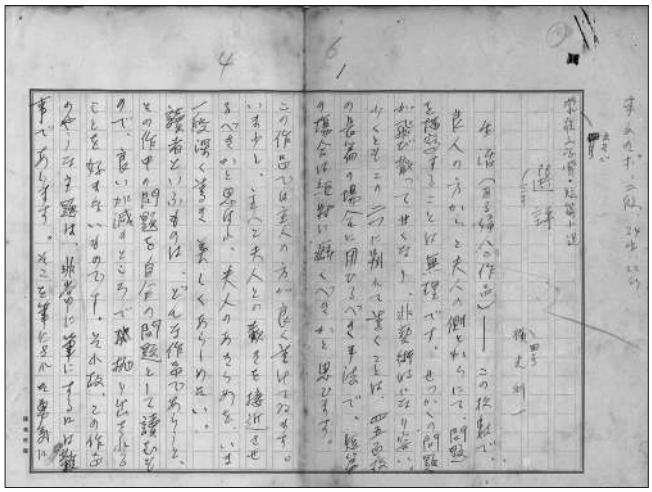
昭和十七年十月に、中国人、モンゴル人計二十五名が文芸懇話会を開催し、華文「蒙疆文學」誌を十二月号から発刊決定。

十一月五日を中心に「大東亜文学者大会」を日本国が開催、日華蒙の代表が出席するようにと興亜院（政府外交部）から連絡があり、急遽、懇話会から三名、小池秋羊、和正華、恭佈札布が出席、東京の日比谷公会堂で開催、宿舎は帝国ホテル、出席者一同、挨拶の言葉を自国語で話した。モンゴル語の通訳はいなくて、父がモンゴル語を知らないのに仕方なくそれらしく伝えて、申訳なくて冷汗をかきながらその場を凌いだ。

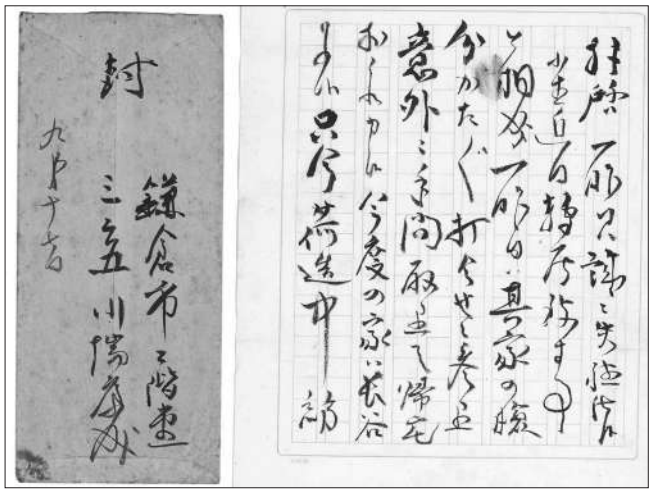
その会場で小説、詩の審査をお願いした作家達に会って次回の芥川賞への蒙疆懇話会同人の作品の推挙、後押をお願いした、と伝わっている。時局柄もあって張家口にも可能性はなきにしもあらずとの思いもあった。

昭和十八年に入ると雑誌発行にかかわっていた同人達に、転勤や病気、出征と変化が増して、本業の傍らの悲しさ、編集も難しくなってきた。仕方なく休刊も多くなった。

昭和十八年八月、芥川賞第十七回受賞者　石塚喜久三「蒙疆文學」の懸賞応募入選作「纏足の頃」が受賞作と決定。本国はもとより建国のはやかった満洲国へ行かず、中国で一番文化の発達した美しい北京を飛び越して、海を渡ってモンゴルの地へ来た芥川賞。掲載誌を作り、文



横光利一の手書き原稿



川端康成からの手紙

学仲間が寄り添っての蒙疆文芸懇話会の同人達の感慨も喜びもひとしお。本土から遥かなる張家口へ渡ってきた。新しいモンゴルの独立した邦造りを目ざして祖国日本を離れている人々の所へ。賞金五百円ならびに記念品。国策にそい、時流に乗った受賞決定とも云われたが人々の関心は集った。

昭和十八年八月に第二回大東亜文学者決戦大会に張家口文芸懇話会より代表五名が東京へ、日文部幹事、赤塚欣二、石塚喜久三、青木啓、華文部幹事、王承琰、蒙古人代表包崇新、以上日程を終えて帰還するのは九月中旬なるを以って十一月号に当誌は大東亜文学者特集号を予定している。「蒙疆文學」誌上で予告し同人達の喜びは頂点を極めた。

芥川賞候補感想
横光　利一
辭退のこと
山本　周五郎
川端　康成
河上徹太郎
第十七回芥川龍之介賞
直木三十五賞　決定發表
第十七回芥川龍之介賞を
左の通り贈呈す
芥川龍之介賞
維足の頃（蒙疆文學）　石塚喜久三
賞・五百圓正記念品
日本文學振興會

「文藝春秋」掲載記事

だがこの期に赤塚欣二（電業）が宣化へ転勤後まもなく応召、青木啓（華北鉄道）は新京へ転勤、カットや挿絵を画く高玉輝雄（蒙疆新聞社）は婚約直後、時局柄早くに式をと結婚準備も万端整っていたが召集令状が届き、周囲の勧めと女性のたっての願いもあって、婚約解消を申出るも果せず、蒙疆神社で挙式十日余りで出征、フィリピンで戦死された。

新妻の育子さんは七十歳まで高玉育子で通され、八重嶋育子と旧姓に戻られ九十六歳までも独り身で生抜かれた。私の祖母と母は折々高玉夫妻を思い出しては涙を拭っていた。

高玉さんが我家に来られると弟が纏わりついて離れなく、挿絵の打合せも儘ならず、大好きな高玉さん！なので、父は母を呼んで弟を連れ出すことも度々の優しいお兄さんだった。

昭和十八年十二月号編集後記には加えて南春夫も発疹チフスの疑いで倒れ、十一月号は休刊の止むなきになった。

それぞれの職場を持ち乍らのこういう仕事にとって、こんな風な浮き沈みは当たり前のことながら一度に来たので堪らなかった。しかしバトンは決して離さず走り続ける覚悟である。

新年号は今後、落合、森江、小山内、小池の四人の編集陣で持って行く。会も明年は「公法人」の性格が賦與され、拡大改組され、本誌もそれにつれて一段と内容が充実されるはずである。前途に豪も杞憂なきを断言したい。

読者諸氏の多幸の迎年を祈る、と書かれた。

「公法人」の性格が賦與されとあるは、蒙疆政府が文芸懇話会の組織を利用し弘報、文化活動に公的資金、法人組織化を補助して張家口での文化方面を育て充実を計画した。

張家口の日本人社会は、駐蒙軍、蒙疆政府、領事館、居留民団（民間組織）で成立していたが、第二次世界大戦下にあっても、市内は治安がよく、時流に沿っていれば全く自由に活動することができて物資も豊富に出回っていた。

蒙古聯合自治政府が昭和十四年に成立後の政府の運営資金はその多くを芥子を

栽培し、阿片に精製、商品化し上海の阿片市場で売り捌く仕事は駐蒙軍が手掛け、政府資金に、純金を購入し蒙彊銀行発券の通貨の裏付になった。

阿片での資金作りは日本国近衛総理大臣、岸信介商工大臣の認可で行われたと久米宏のルポルタージュ番組でその認可書が映像に映し出された。満洲国も同様であった。

平成二十年八月のＮＨＫスペシャルで放映された「調査報告　日本軍と阿片」では板垣征四郎元陸軍大臣と東條英機元総理大臣の両人が東京裁判で阿片を中国に蔓延させたことが起訴事実の一つとされた。両人は昭和十八年に張家口を攻め落とした兵団長だった。

昭和十九年二月中旬に父に赤紙が来て応召して行った。二月始めに眞紀子を出産し母は未だ産褥にあり、祖母と一年生を目前にした海児が張家口駅頭へ父を見送りに。社員や知人、友人の見送りの人々で父の側まで行きつくのも大変だったと帰宅した祖母たみは話していた。

私も見送りに行きたかったのに母が登校するようにと仕方なく学校へ行った。教室に入ると久保田フジエ先生が待っていてくださった。先生は何も仰しゃらずに黙って私の頭を撫でておられる。思わず先生のお顔を見上げるとお目が赤くて涙が私の顔に落ちた。

母が私を学校に送り出したのは父との別れに私が大泣きする心配があったのかと今思う。

二年生になっていなかった私を先生は案じられてか。我家によく遊びにいらした久保田先生、お風呂に入って帰られたり。遅くなって北京からお産で実家へ戻っていた小波叔母と二人で先生のお家近くまで送ったことも。

「蒙疆文學」は父の応召で、その後の雑誌も我家にはなく、敗戦までの十八か月に何時出版できなくなったのか、私には調べようもない。

留守家族になった我家一家に会社は帰国を勧めてきた。父の友人達が時に留守宅見舞いに来て下さり、その一人に母が夫は同じ地続きのこの地で戦っているのに帰国はしたくないと嘆くと丁度良い。是非帰国なさい。この戦は日本が敗けます。その時にこの小さな子達でどうします。敗けなければ里返りしてきたと思い張家口に戻ればいいでしょう。日本で今は敵国と敗戦後の天皇の処遇を交渉中です。とその右翼の友人に教えられ、直ちに帰国を決意して、昭和十九年九月三十日に張家口を後にした。

晴れ渡った張家口の秋空、東大平山の山波もくっきりの朝、社長公館で最後の夜を過し、社長の車で駅へ。父は応召前には社長秘書を勤めていたが、自由に何でも好きなようにさせてもらえ、人柄を尊敬し仕事に励んだ。

父の蔵書を友人達が我家へ数日通われて、会社に預ける本、日本へ送る本を仕分け、家具も一部預けた。母も帰国は決めても戦いに敗けると本気で考えただけでもなかったか。昭和二十一年四月に帰国した父が半分以上の本を張家口に置いて帰国したと知って二か月も母に最小限にしか口をきかなかったと母は苦笑していた。

芥川賞第七十七回受賞、池田満寿夫は敗戦時一九四五年張家口第一国民学校六年生で学齢前から住んでいた張家口に縁りの人である。

筆者略歴（つるどめ　えま）

張家口市に五年間幼少時を暮らす。東京女学館中学校、戸山高校卒。張家口倶楽部会員。